

魔術

芥川龍之介

青空文庫

ある時^{しぐれ}雨の降る晩のことです。私^{わたし}を乗せた人力車^{じんりきしゃ}は、何
 度も大森^{おおもり}界隈^{かいわい}の険しい坂を上ったり下りたりして、やっと
 たけやぶ^{たけやぶ}竹藪^{たけくさ}に囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒^{かじぼう}を下しました。も
 う鼠色^{ちようちん}のペンキの剥^はげかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出し
 た提灯^{ちようちん}の明りで見ると、印度人^{インド}マティラム・ミスラと日本
 字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札^{ひょうさつ}がかかっ
 ています。

マティラム・ミスラ君と云えば、もう皆さんの中にも、御存じ
 の方が少くないかも知れません。ミスラ君は永年印度の独立を計っ
 ているカルカッタ生れの愛国者で、同時にまたハッサン・カンと

いう名高い婆羅門ばらもんの秘法を学んだ、年の若い魔術まじゅつの大家なので
す。私はちょうど一月ばかり以前から、ある友人の紹介でミスラ
君と交際していましたが、政治経済の問題などはいろいろ議論し
たことがあっても、肝腎かんじんの魔術を使う時には、まだ一度も居合
せたことはありません。そこで今夜は前以て、魔術を使って見せ
てくれるように、手紙で頼んで置いてから、当時ミスラ君の住ん
でいた、寂しい大森の町はずれまで、人力車を急がせて来たので
す。

私は雨に濡れながら、覚束おぼつかない車夫の提灯の明りを便りにそ
の標札の下にある呼鈴よびりんの鉦ボタンを押しました。すると間もなく戸が
開いて、玄関へ顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背

の低い日本人の御婆さんです。

「ミスラ君は御出でですか。」

「いらっしやいます。先ほどからあなた様を御待ち兼ねでございました。」

御婆さんは愛^{あいそ}想よくこう言いながら、すぐその玄関のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晚は、雨の降るのによく御出ででした。」

色のまっ黒な、眼の大きい、^{やわらかくちひげ}柔な口髭のあるミスラ君は、テ

エブルの上にある石油ランプの心^{しん}を^{ねじ}捻りながら、元氣よく私に^{あいさつ}挨拶しました。

「いや、あなたの魔術さえ拝見出来れば、雨くらいは何ともあり

ません。」

いす

私は椅子に腰かけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰気な部屋の中を見廻しました。

ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテーブルが一つ、
かべぎわ

壁側に手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ——ほかにほただ我々の腰をかける、椅子が並んでいるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけた物ばかりで、縁ふちへ赤く花模様を織り出した、派手なテーブル掛でさえ、今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目が露あらわになっていました。

私たちは挨拶をすませてから、しばらくは外の竹藪に降る雨の音を聞くともなく聞いていましたが、やがてまたあの召使いの御

婆さんが、紅茶の道具を持ってはいって来ると、ミスラ君は葉はま巻きの箱の蓋ふたを開けて、

「どうです。一本。」と勧めすすてくれました。

「難ありがと有えんりよう。」

私は遠慮なく葉巻を一本取って、燐マツチ寸の火をうつしながら、

「確かあなたの御使いになる精霊せいれいは、ジンとかいう名前でしたね。するとこれから私が拝見する魔術と言うのも、そのジンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉巻へ火をつけると、にやにや笑いながら、
 匀なおの好い煙を吐いて、

「ジンなどという精霊があると思ったのは、もう何百年も昔のこ

とです。アラビヤ夜話^{やわ}の時代のこととでも言いましょうか。私がハッサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使おうと思えば使えますよ。高が進歩した催眠^{さいみんじゅつ}術に過ぎないのでから。

——御覧なさい。この手をただ、こうしさえすれば好いのです。」

ミスラ君は手を挙げて、二三度私の眼の前へ三角形のようなものを描きましたが、やがてその手をテエブルの上へやると、縁へ赤く織り出した模様の花をつまみ上げました。私はびっくりして、思わず椅子^{いす}をずりよせながら、よくよくその花を眺めました。確かにそれは今の今まで、テエブル掛の中にあつた花模様の一つに違いありません。が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持ってくる、ちょうど麝香^{じやこう}か何かのように重苦しい匂さえるので

す。私はあまりの不思議さに、何度も感嘆かんとんの声を洩もらしますと、ミスラ君はやはり微笑したまま、また無造作むぞうさにその花をテエブル掛の上へ落しました。勿論落すともとの通り花は織り出した模様になって、つまみ上げること所か、花びら一つ自由には動かせなくなってしまうのです。「どうです。訳はないでしょう。今度は、このランプを御覧なさい。」

ミスラ君はこう言いながら、ちよいとテエブルの上のランプを置き直しましたが、その拍子ひょうしにどういう訳か、ランプはまるで独楽こまのように、ぐるぐる廻り始めました。それもちゃんと一ひととこ所に止ったまま、ホヤを心棒しんぼうのようにして、勢いよく廻り始めたのです。初はじめの内は私も胆きもをつぶして、万一火事にでもなっ

は大変だと、何度もひやひやしましたが、ミスラ君は静に紅茶を飲みながら、一向騒ぐ容子ようすもありません。そこで私もしまいは、すっかり度胸が据すわつてしまつて、だんだん早くなるランプの運動を、眼も離さず眺めていました。

また實際ランプの蓋が風を起して廻る中に、黄いろい焰ほのおがたつた一つ、瞬またたきもせずにともっているのは、何とも言えず美しい、不思議な見物みものだったのです。が、その内にランプの廻るのが、いよいよ速すみやかになつて行つて、とうとう廻つていゝとは見えないほど、澄み渡つたと思ひますと、いつの間まにか、前のようにホヤ一つ歪ゆがんだ気色けしきもなく、テエブルの上に据たまつていました。

「驚きましたか。こんなことはほんの子供瞞だましですよ。それとも

あなたが御望みなら、もう一つ何か御覧に入れましょう。」

ミスラ君は後を振返^{うしろ}って、壁側^{かべぎわ}の書棚を眺めましたが、やが

てその方へ手をさし伸ばして、招くように指を動かすと、今度は書棚に並んでいた書物が一冊ずつ動き出して、自然にテエブルの上まで飛んで来ました。そのまた飛び方が両方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛び交^{こうもり}う蝙蝠^{くわ}のように、ひらひらと宙へ舞上るので、私は葉巻を口へ唧^{くわ}えたまま、呆^{あっけ}気にとられて見ていました。が、書物はうす暗いランプの光の中に何冊も自由に飛び廻^{かえ}って、一々行儀よくテエブルの上へピラミッド形に積み上りました。しかも残らずこちらへ移ってしまったと思うと、すぐに最初来^{かえ}たのから動き出して、もとの書棚へ順々に飛び還^{かえ}って行くじゃありま

せんか。

が、中でも一番面白かったのは、うすい仮綴かりとじの書物が一冊、

やはり翼のように表紙を開いて、ふわりと空へ上りましたが、しばらくテエブルの上で輪を描いてから、急に頁をざわつかせると、逆落さかおとしに私の膝へさっと下りて来たことです。どうしたのかと

思つて手にとつて見ると、これは私が一週間ばかり前にミスラ君へ貸した覚えがある、仏蘭西フランスの新しい小説でした。

ながなが「永々御本を難有ありがとう。」

もちろんミスラ君はまだ微笑を含んだ声で、こう私に礼を言いました。

勿論その時はもう多くの書物が、みんなテエブルの上から書棚の中へ舞い戻ってしまっていたのです。私は夢からさめたような

心もちで、暫時ざんじは挨拶さえ出来ませんでした。その内にさつきミスラ君の言った、「私の魔術などというものは、あなたでも使おうと思えば使えるのです。」という言葉を思い出しましたから、

「いや、兼ね兼ねひょうばん評判はうかがっていましたが、あなたのお使いなさる魔術が、これほど不思議なものだろうとは、実際、思いもありませんでした。ところで私のような人間にも、使って使えないことのないと言うのは、御冗談ではないのですか。」

「使えますとも。誰にでも造作ぞうさなく使えます。ただ——」と言いかけてミスラ君はじつと私の顔を眺めながら、いつになくまじめ真面目な口調になって、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術を習おうと思ったら、まず欲を捨てることです。あなたにはそれが出来ますか。」

「出来るつもりです。」

私はこう答えましたが、何となく不安な気もしたので、すぐにまた後から言葉あとを添えました。

「魔術さえ教えて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑わしそうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのは無駄ぶしつけだとも思っただけでしょう。やがて大様に頷うなずきながら、

「では教えて上げましょう。が、いくら造作なく使えると言って

も、習うのには暇もかかりますから、今夜は私の所へ御泊りなさい。」

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教えて貰う嬉しさに、何度もミスラ君へ御礼を言いました。が、ミスラ君はそんなことに頓とんちやく着する気色けしきもなく、静に椅子から立上ると、

「御婆サン。御婆サン。今夜ハ御客様ガ御泊リニナルカラ、寢床ノ仕度ヲシテ置イテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まとも
に石油ランプの光を浴びた、親切そうなミスラ君の顔を思わずじつ
と見上げました。

×

×

×

私がミスラ君に魔術を教わってから、一月ばかりたった後のことです。これもやはりざあざあ雨の降る晩でしたが、私は銀座のある倶楽部の一室で、五六人の友人と、暖炉だんろの前へ陣取りながら、気軽な雑談に耽っていました。

何しろここは東京の中心ですから、窓の外に降る雨脚あまあしも、しつ

きりなく往来する自働車や馬車の屋根を濡らすせいか、あの、おおも大森の竹藪にしぶくような、ものさびしい音は聞えません。

勿論窓の内の陽気なことも、明い電燈の光と言い、大きなモロツコ皮の椅子いすと言い、あるいはまた滑かに光っている寄木細工よせぎざいくの床ゆかと言い、見るから精霊せいれいでも出て来そうな、ミスラ君の部屋などとは、まるで比べものにはならないのです。

私たちは葉巻の煙の中に、しばらくは獵りようの話だの競馬の話だのをしていましたが、その内に一人の友人が、吸いさしの葉巻を暖炉だんろの中に抛りこんで、私の方へ振り向きながら、

「君は近頃魔術を使うという評判ひようばんだが、どうだい。今夜は一つ僕たちの前で使って見せてくれないか。」

「好いとも。」

私は椅子の背に頭を靠もたせたまま、さも魔術の名人らしく、横おう

柄^{へい}にこう答えました。

「じゃ、何でも君に一任するから、世間の手品師^{てじなし}などには出来そうもない、不思議な術を使って見せてくれ給え。」

友人たちは皆賛成だと見えて、てんでに椅子をすり寄せながら、促すように私の方を眺めました。そこで私は徐^{おもむろ}に立ち上って、

「よく見ていてくれ給えよ。僕の使う魔術には、種も仕掛^{しかけ}もないのだから。」

私はこう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖炉の中に燃え盛^{さか}っている石炭を、無造作^{むぞうさ}に掌の上へすくい上げました。

私を囲んでいた友人たちは、これだけでも、もう荒胆^{あらぎも}を挫^{ひし}がれたのでしよう。皆顔を見合せながらうっかり側へ寄って火傷^{やけど}で

もしては大変だと、気味悪るそうにしりごみさえし始めるのです。そこで私の方はいよいよ落着き払って、その掌の上の石炭の火を、しばらく一同の眼の前へつきつけてから、今度はそれを勢いよく寄木細工の床へ撒き散らしました。その途端です、窓の外に降る雨の音を圧して、もう一つ変わった雨の音が俄に床の上から起つたのは。と言うのはまっ赤な石炭の火が、私の掌を離れると同時に、無数の美しい金貨になって、雨のように床の上へこぼれ飛んだからなのです。

友人たちは皆夢でも見ているように、茫然と喝采するのさえも忘れていました。

「まずちよいとこんなものさ。」

私は得意の微笑を浮べながら、静にまた元の椅子に腰を下しました。

「こりや皆ほんとうの金貨かい。」

呆気にとられていた友人の一人が、ようやくこう私に尋ねたのは、それから五分ばかりたった後のことです。

「ほんとうの金貨さ。嘘だと思ったら、手にとって見給え。」

「まさか火傷やけどをするようなことはあるまいね。」

友人の一人は恐る恐る、床の上の金貨を手にとって見ましたが、「成程こりやほんとうの金貨だ。おい、給仕ほうき、箒と塵取りとを持って来て、これを皆掃き集めてくれ。」

給仕はすぐに言いつけられた通り、床の上の金貨を掃き集めて、

うずたか

堆く側のテーブルへ盛り上げました。友人たちは皆そのテーブルのまわりを囲みながら、

「ざっと二十万円くらいはありそうだね。」

「いや、もっとありそうだ。華奢きゃしゃなテーブルだった日には、つぶれてしまうくらいあるじゃないか。」

「何しろ大した魔術を習ったものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」

「これじゃ一週間とたたない内に、岩崎や三井にも負けないような金満家になってしまいうだろう。」などと、口々に私の魔術を褒ほめそやしました。が、私はやはり椅子いすによりかかったまま、悠然と葉巻の煙を吐いて、

「いや、僕の魔術というやつは、一旦欲心を起したら、二度と使うことが出来ないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまった上は、すぐにまた元の暖炉の中へ抛りこんでしまおうと思っっている。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言い合せたように、反対し始めました。これだけの大金を元の石炭にしてしまうのは、もったいない話だと言うのです。が、私はミスラ君に約束した手前もありますから、どうしても暖炉に抛りこむと、ごうじよう剛情に友人たちと争いました。すると、その友人たちの中でも、一番狡猾だといこうかつう評判のあるのが、鼻の先で、せせら笑いながら、

「君はこの金貨を元の石炭にしようと言う。僕たちはまたしたく

ないと言う。それじゃいつまでたった所で、議論が干^ひないのは当り前だろう。そこで僕が思うには、この金貨を元手にして、君が僕たちと骨^{かるた}牌をするのだ。そうしてもし君が勝ったなら、石炭にするとも何にするとも、自由に君が始末するが好^いい。が、もし僕たちが勝ったなら、金貨のまま僕たちへ渡し給え。そうすれば御互の申し分も立って、至極満足だろうじゃないか。」

それでも私はまだ首を振って、容易にその申し出しに賛成しようとはしませんでした。所がその友人は、いよいよ嘲^{あざけ}るような笑^{えみ}を浮べながら、私とテーブルの上の金貨とを咬^ずるそうにじろじろ見比べて、

「君が僕たちと骨^{かるた}牌をしないのは、つまりその金貨を僕たちに

取られたくないと思うからだろう。それなら魔術を使うために、
欲心を捨てたとか何とかいう、折角せっかくの君の決心も怪しくなっ
てくる訳じゃないか。」

「いや、何も僕は、この金貨が惜しいから石炭にするのじゃな
い。」

「それなら骨牌かるたをやり給えな。」

何度もこういう押問答を繰返した後で、とうとう私はその友人
の言葉通り、テエブルの上の金貨を元手もとでに、どうしても骨牌かるた
を闘わせなければならぬ羽目はめに立ち至りました。勿論友人たち
は皆大喜びで、すぐにトランプを一組取り寄せると、部屋の片隅
にある骨牌机かるたづくえを囲みながら、まだためらい勝ちな私を早く早

くと急^せき立てるのです。

ですから私も仕方がなく、しばらくの間は友人たちを相手に、嫌^{いや}々^{いや}骨牌^{かるた}をしていました。が、どういふものか、その夜に限って、ふだんは格別骨牌^{かるた}上手でもない私が、嘘のようにどんどん勝つのです。するとまた妙なもので、始は気のりもしなかったのが、だんだん面白くなり始めて、ものの十分とたたない内に、いつか私は一切を忘れて、熱心に骨牌^{かるた}を引き始めました。

友人たちは、元より私から、あの金貨を残らず捲^まき上げるつもりで、わざわざ骨牌^{かるた}を始めたのですから、こうなると皆あせりにあせて、ほとんど血相^{けっそう}さえ変るかと思うほど、夢中になつて勝負を争い出しました。が、いくら友人たちが躍起となつても、

私は一度も負けないばかりか、とうとうしまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金^{きんだか}高だけ、私の方が勝ってしまったじゃありませんか。するとさっきの人の悪い友人が、まるで、氣違いのような勢いで、私の前に、札^{ふだ}をつきつけながら、

「さあ、引き給え。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家^か作も、馬も、自動車も、一つ残らず賭けてしまふ。その代り君はあの金貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引き給え。」

私はこの刹^{せつ}那に出ました。テエブルの上に積んである、山のような金貨ばかりか、折角私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまわなければなりません。

のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向うの全財産を一度に手へ入れることが出来るのです。こんな時に使わなければどこに魔術などを教わった、苦心の甲斐かいがあるのでしょうか。そう思うと私は矢も楯もたやたまらなくなつて、そつと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引き給え。」

「九」^く

「王様」^{キング}

私は勝ち誇つた声を挙げながら、まっ蒼になつた相手の眼の前へ、引き当てた札ふだを出して見せました。すると不思議にもその骨牌かるたの王様キングが、まるで魂がはいったように、冠かんむりをかぶつた頭

を擡もたげて、ひよいと札ふだの外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮べて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御帰リニナルソウダカラ、寢床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降る雨脚あまあしまでが、急にまたあの大森の竹藪にしぶくような、寂しいざんざ降ぶりの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見廻すと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであの骨牌かるたの王様キングのような微笑を浮べているミスラ君と、向い合って坐っていたのです。

私が指の間に挟はさんだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまってい

る所を見ても、私が一月ばかりたつたと思ったのは、ほんの二三分の間に見た、夢だったのに違いありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間だということは、私自身にもミスラ君にも、明かになってしまったのです。私は恥しそうに頭を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業が出来ていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな眼つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り出したテエブル掛の上に肘をついて、^{ひじ}静にこう私をたしなめました。

（大正八年十一月十日）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1998年12月8日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魔術

芥川龍之介

2022年 5月 3日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>